

【選評】

東京大学准教授

小川浩之



アパルトヘイトを撤廃させた プラグマティスト その実像と功罪に迫る

本書は『異郷のイギリス——南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』（丸善出版、二〇一八年）とい

う優れた研究書を著し、キース・ブレッケンリッジ『生体認証国家——グローバルな監視政治と南アフリカの近現

ネルソン・マンデラ

——分断を超える現実主義者

堀内隆行・著

岩波新書／2021年7月／880円

代』（岩波書店、二〇一七年）の翻訳も手掛けた気鋭の南アフリカ史、イギリス帝国史研究者によるネルソン・マンデラの評伝である。著者が「あとがき」で、当初はマンデラのような「人たらし」の人物には近づきたくないと思いい、彼の話題を避けていたと記しているのは意外に感じられるかもしれないが、そうした対象との距離感は、マンデラという「偉大な」人物に関するバランスがとれた分析を可能にしたと考えられる。

柔軟なプラグマティズム

著者は、本書の目的を「マンデラのハンディな評伝を目指す」ことだとする（vi頁）。本書はその目的を高いレベルで達成していると考えられるが、それは、著者がマンデラの「聖人視」を避けつつ、そのうえで、なぜ彼が人種隔離政策（アパルトヘイト）の終結

や南アフリカ社会の分断の克服——それはさまざまな肌の色の人々が共生する「虹の国」として表象された——などに大きな貢献（ただし後述するようにに限りもあった）を行うことができたのかを、冷静に論じていることに理由があるといえるだろう。

著者によれば、マンデラは一貫した思想を説き続けたわけではなく、傑出した理論家や時代を超越した思想家でもなかった。また、キング牧師ほどの演説の妙手でもなかった。しかし、歴史研究者としての著者は、マンデラの人生を南アフリカ近現代史の中に位置づけて論じつつ、次のように指摘する。「人はすべて時代の所産であり、時代背景が分からなければ理解できない。もちろんこの原則を踏まえた上で、人物が傑出している理由に迫ることは重要である。マンデラの場合、それは感化能力や自己演出力、もしくはリアリ

ズムだろうか」（一六八頁）。

本書では特にマンデラの柔軟なブラグマティズムの意義が強調されるが、マンデラ自身も、自伝『自由への長い道』の中で、「人と人のあいだにある偏見を拭い去る、そして、狂信的で暴力的な国家主義の息の根を止めるという目的をあと押ししてくれるものなら、わたしはなんでも役立てるつもりだった」と書いている（三九頁に引用）。

共産主義との「共闘」の背景

マンデラと共産主義の関係について踏み込んで議論しているのも、本書の特長の一つである。南アフリカでアパルトヘイト体制が敷かれていた時期（一九四八〜九一年）が、冷戦期とほぼ重なっているのは偶然ではない。国民党政権は、アフリカにおける反共の砦を自任し、米英などの西側主要国も、アパルトヘイトの南アフリカを冷戦下

の地域的な同盟国または「警察官」として支えるという戦略的な相互依存関係が存在したのである。

そうした状況下で、反アパルトヘイト運動の指導者かつ象徴であったマンデラが共産主義者か否かという問いは、非常に政治的かつ論争的なものとなった。冷戦期には南アフリカの国民党政権や西側諸国の指導者らがマンデラをしばしば共産主義者として非難したのに対して、リベラルな研究者などがそれを否定する構図が見られたのである。

例えば、南アフリカのリベラル史学の代表的研究者の一人であったレナード・トンブソンは、マンデラやオリヴァー・タンボなどアフリカ民族会議（ANC）の最高指導者たちは共産主義者ではなかったとする（『南アフリカの歴史 最新版』明石書店、二〇〇九年、三八〇頁）。他方、冷戦

下での南アフリカのアパルトヘイト体制と共産主義勢力のせめぎあい、歴史的文書で明らかにされているだけでなく、さまざまなフィクションの背景にもなった。例えば、イギリスの作家グレーム・グリーンの小説『ヒューマン・ファクター』（一九七八年）では、ソ連に対抗するために南アフリカ政府と共謀するイギリス政府に反発する白人のイギリス情報部員（かつて南アフリカ共産党によって黒人の妻を救出された経験を持つ）が、二重スパイとしてソ連に協力し、やがてモスクワに亡命する。

では、実際はどうだったのか。マンデラと共産主義の関係についての著者の議論は、史実の丁寧な分析に基づいており、説得的である。著者が指摘するように、マンデラは一九六〇年代初めにANCの戦闘的な指導者の一人であった時期に、（当時は公表されな

かったものの）南アフリカ共産党の中央執行委員を兼ねるようになり、共産党と協力関係にあったことは確かである。しかし、マンデラが共産党との関係を深めたのは、反アパルトヘイトの武装闘争を進めるための便宜的な意図に基づく面が大きかった。さらに、マンデラにとって「本当のヒーロー」は、スターリンでも毛沢東でも、そしてガーンディーでさえもなく、インドを独立に導くとともにその初代首相を長年務め、社会主義と資本主義の混合経済を志向したネルーだったのである（五一、五七頁）。

解放の陰で放置された不平等

現代の南アフリカが抱える困難に目を向け、マンデラらによるアパルトヘイトの「終わらせ方」にその一因があったと論じること、本書の重要な点だろう。

著者によれば、マンデラは「独自路線を垣間見せることもあった」ものの、基本的には「欧米諸国にとって優等生だった」。そして、彼のプラグマティズムは、アパルトヘイト終結の際に白人たちを安心させることと引き換えに、経済的不平等の問題を放置する結果につながったとされる。「マンデラ政権は黒人の貧困解消や土地の権利回復よりも、財政の再建と経済のグローバル化を優先した」のである（一五八―一五九頁）。

一九九一年に南アフリカで人種隔離に関する法律が全廃され、アパルトヘイトが終焉してから、すでに三〇年以上が経過した。マンデラは二〇一三年に九五歳で逝去し、九三年に彼と共にノーベル平和賞を受賞したデクラーク元大統領も、二一年一月に八五歳で亡くなった。マンデラの妻で急進的な反アパルトヘイト活動家でもあった

ウィニーや、本書に登場するマンデラと同世代の反アパルトヘイト活動家たちの多くも、すでにこの世を去っている。さらに直近では、アパルトヘイトに対する非暴力の解放闘争を指導し、一九八四年にノーベル平和賞を受賞したツツ元大主教が、二一年二月末に九〇歳で亡くなった。アパルトヘイトとそれへの反対運動は基本的に過去のものである。

しかし、アパルトヘイト終結から三〇年以上を経た南アフリカの現状は、依然としてさまざまな困難に満ちている。南アフリカについて語るとき、しばらく前まではBRICSという言葉がよく用いられた。二〇〇一年にアメリカの投資銀行ゴールドマン・サックスが、投資家向けのレポートで、ブラジル、ロシア、インド、中国という四つの新興大国の英語の頭文字をとってBRICSという略語を紹介した。

それに南アフリカを加えたのがBRICSであり、南アフリカは新興大国の一角を占める存在として注目を浴びたのである。しかしその後、経済成長が続ける中国とインド、経済の低迷が目立つようになったブラジル、ロシア、南アフリカとの間で二極分化が生じ、BRICSという言葉自体もほとんど語られなくなった。

南アフリカは、二〇一〇年にアフリカで初めてサッカーのワールドカップの開催国となった頃までは、経済発展と国際的地位の向上を順調に達成しているようにも見えた。しかし著者が、そのワールドカップの決勝に先立ち、すでに老化が目立つようになっていたマンデラがゴルフカートでスタジアムを一周したのを最後に、公の場に姿を見せる機会がなくなったことに言及するのは、マンデラの衰えとある意味で軌を一にするように、一〇年代以降、

南アフリカの経済が徐々に低迷の度合いを強め、政治が汚職の蔓延などで混乱を深めていくことを暗示しているようにも感じられた。さらに、二〇年以降は、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう経済の急激な落ち込みが、アパルトヘイト後も根強く残る貧困や人種間の格差の問題をより深刻化させた。

これらすべてをマンデラと結びつけて論じるのは、むしろ行き過ぎであろう。しかし、アパルトヘイト後の南アフリカが「虹の国」やBRICSの一角として注目を浴びた一方で、アパルトヘイト時代から残された貧困や人種をめぐる問題に苦悩する様子は、反アパルトヘイト運動の指導者かつ象徴であり、アパルトヘイト後に黒人初の大統領を務めたマンデラの功罪について、あらためて多面的に捉え直す必要性を示しているといえるだろう。●